様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４３９７

研究課題名（和文）現代青少年に適合する心理テストバッテリー法の構築と支援

研究課題名（英文）Construction and support of psychological test battery adjusting to modern adolescent

研究代表者
高橋　昇（TAKAHASHI, NOBORU）

愛知淑徳大学・心理学部・教授

研究者番号：１０４４１６１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究では、精神的な問題や病を抱える人への援助のために、どのような心理検査の組み合わせが有効であるかを考える。まず、発達障害を抱えた人の知能検査と予後の関係を調べ、描画法との組み合わせの有効性が示唆された。
　また、本邦では新しい心理検査である対象関係投映法(以下ORTと略）を健常者と統合失調症者に施行して、質問紙やロールシャッハ法と比較した。そしてORTの特徴と有効性を探り、他の心理検査と補完的に使用できることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　心理テストは心の問題や病気を抱えたクライエントの問題解決や良い生き方を選択するために、臨床の分野で診断や理解の方法として重要なものである。実践的には心理検査は１種のみで実施されることは少なく、テストバッテリーとしていくつかの組み合わせとしてなされる。
　今回、青少年へのアプローチとして、知能検査、質問紙法、投映法の組み合わせを考え、健常群、発達障害、統合失調症の対象者にテストバッテリーを試み、ORTという新しい投映法の有効性も併せて確かめた。人の心の意識的部分から無意識までどのように測定できるかを明らかにし、これらは病気や悩みを持った方々に対するより有用な心理検査の実施に役立てることができる。

研究成果の概要（英文）：　In this study, I investigate efficient pairing of psychological tests for support to people with mental problems and disorders.
　Firstly, I examined the relationship between intelligence test and prognosis of people with developmental disorder, and found efficiency in pairing with drawing method.
　Also, we practiced ORT (The Object Relations Technique), which is new in this country, to healthy people and people with schizophrenia, and compared with questionnaire method and Rorschach test. Therefore we explored particularity and efficiency of ORT, and found that we can use it as complementary with other psychological tests.

研究分野：臨床心理学、心理査定学を基本に、分析心理学の立場とロールシャッハ法、風景構成法が専門分野

キーワード：心理テストバッテリー　発達障害　統合失調症　ORT　描画法　ロールシャッハ法　知能検査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

従来、心理アセスメントは教育領域、病院臨床領域、産業領域などそれぞれが独立して行われ、領域間を見渡すものが乏しかったといえる。教育場面では、発達障害や解離性障害、パーソナリティ障害という病態に対しての理解は不十分であり、深い理解を持って取り組めていないのが日本の現状である。病院臨床場面では大人の臨床比率が高く、近年さまざまな病態水準のクライエントが増加するにつれて、より広い支援が必要とされるようになってきている。特に、近年は発達障害者の増加も注目を浴びているが、まず対象者を内的に理解することが重要であり、下記の研究を進めてきた。

（1）研究代表者は、研究分担者である高橋靖恵の「児童青年の対人関係障害に対する多次元的アセスメントによる理解と援助」科学研究費補助金（基盤研究(B) 課題番号 18330147）(H.18～21 研究代表者高橋靖恵 ）研究に研究分担者として加わり、現代の児童青年の複雑な精神的問題や人格を理解するためには多元的な心理アセスメントが必要であり、それがよりよい支援に繋がることを明らかにした。

（2）研究代表者は、境界性パーソナリティ障害者のロールシャッハ法について、心理療法的な視点を提供した（心理臨床学研究 12 巻 4 号 1995、「実践ロールシャッハ法」ナカニシヤ出版 2010)。

（3）研究代表者は、心理療法とアセスメントの統合のために心理療法的テストバッテリーという考え方に及び、ロールシャッハ法と風景構成法の修正技法を考案し、使用法を著した（「投映法の心理療法的バッテリー」人間環境大学臨床心理相談室紀要 4　2010)。そして、博士学位論文として（投映法の心理療法的バッテリーに関する研究－ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の統合的活用－ 2014）を著述した。

（4）研究代表者はここからさらに、さまざまな病態や年齢に応じたテストバッテリーの必要性を感じ、従来バラバラであったその在り方を統合する必要性、中でも知能検査のような構造が明確なものと投映法のような構造が曖昧なものは、基本的に対照的な理解をもたらすと考えた。

（5）連携研究者の松瀬喜治と黒田浩司は ORT という新しい技法を用いて、精神分析的な観点からのアセスメント研究を行っている。それらを統合することが、新しいアセスメントの在り方を提唱し、よりよい支援に繋がると考えられる。

２．研究の目的

（1）第一に心理検査を通して青少年の深層の表れを理解する。これは健常人から臨床群を含み、学校での実施は健常な子どもの中にある深層心理的な問題をあぶり出す意味合いがある。ここから子どもの心理的問題の早期発見と予防的かかわりのための指標を見いだしていく。これは発達的観点からも重要である。技法としては、投映法から知能検査、質問紙法なども含んでいる。

（2）ここで並行して、より有用な技法と考えられる ORT の実施と、導入のために原著を翻訳する。

（3）それにより健常人から臨床群までの連続性や相違点、類似点が明らかにされよう。スクリーニングのための質問紙レベルの検査とともに、個別に投映法を実施してそれぞれの病態水準ごとの表れを探る。これらは治療的かかわりの中で行い、継続的な施行の中で心理テストバッテリーを個別に考えていく。

（4）そしてこれらの組み立ての作業に入り、適応不全予備群、適応に問題のある病理群の特徴と治療的なかかわりの中での心理検査のバッテリーを考えていく。

（5）それらの結果は心理検査のアセスメントの側面のみならず、心理療法的な適用法に繋がり、どのような心理検査が使用できるか、適当な時期における使用法を考慮に入れて、心理テストバッテリー法を構築する。

３．研究の方法

研究は基本的に心理テストをさまざまな対象者に実施し、組み合わせを考えていくことになる。対象者は児童から青年期にかけての年代であり、健常者から精神病水準である統合失調症者までとなる。具体的には下記のようになる。

（1）小・中学生の発達障害者の資料については、研究協力者の服部孝子（教育相談室臨床心理士）らにより収集されたものがある。これに加えて知能検査と投映法を含めたテストバッテリーを実施する。

（2）ORT は、連携研究者の黒田浩司により健常者の資料が集められており、研究代表者も違った視点からの健常者への資料を収集する。さらに、臨床事例に拡大し、研究代表者の在籍する精神科病院において、統合失調症者のクライエントに対しての投映法をテストバッテリーとして実施する。

（3）資料の分析をし、より効果的なアセスメント法と、それを心理療法的に使用するかかわりについて実践し、いくつかの心理検査、ロールシャッハ法、ORT、描画法、知能検査などを選択して組み合わせを考える。

（4）深層的な理解とより有効なかかわりについて、健常群の子ども、教育相談室での臨床群の子ども、精神科病院においての大人の事例と比較検討する。

（5）ORT に関して、邦文のマニュアルが出版されていないことから、邦訳をして日本国内に広める方向で研究を進めていく。

4. 研究成果

（1）愛知県岡崎市幸田町の教育相談室（ピッコロ）における小学生から中学生の発達障害者に対して、研究協力者である服部孝子及び、ピッコロ研究会のメンバーとともに、今まで 10 数年間に及ぶ通級者の中から、WISC-Ⅲを複数回実施した事例を選択し、知能検査から理解される適応力の構造を探索し、経年的変化をとらえ、よい効果的なかかわりについて考察した。12 例の発達障害児の WISC-Ⅲの 2 回分の結果が図 1 であり、A 群：2 回目上昇、B 群：2 回とも変化なし、C:2 回目下降となっている。予後調査をして、予後との関連から、知的機能の良否にかかわらず、周囲からの支援との関連で、一定時期に良い支援があれば、予後は良好だと考えられた。

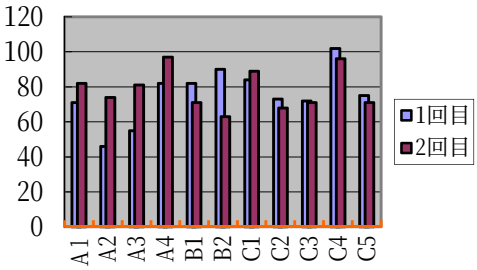

図 1. 12 例の WISC-Ⅲ

この研究は教育相談室にかかわるクライエントの人物画テストとの関連に及び、WISC-Ⅲで測られた知的機能と描画テストとの関連から、知的機能のばらつきと描画に表現される情緒的な問題は、情緒障害児は無論のこと、発達障害を抱えた子どもにとっても重要であることがわかり、幸田町教育相談室主催研修会（2019）において、教員、特別支援教育の教員、保健師などと共有した。

ここでは、心理テストバッテリーとして、WISC-Ⅲの結果と合わせて精査したが、バウムテストや自由画などでは一貫した結果が見えにくく、それぞれのプレイセラピーの中では有用であるものの、全体として一定の知見を見いだすことが難しいことが理解された。そこで、WISC-Ⅲと共に描画法の中でも枠組みが明確で情報量の多い風景構成法を導入するべく、準備を進めてきた。2020 年になり、コロナウィルス感染問題が大きな影響を及ぼして実施が困難になっていたものの、現在前向きに進めており、小学生から中学生までの健常児童、生徒を対象者として風景構成法が実施できる見込みにある。

（2）別の投映法である ORT について、連携研究者の黒田浩司は健常大学生 122 名の ORT の特徴を明らかにし、研究代表者は健常大学生の 4 事例を取りあげて分析することで、より細密な特徴を明らかにした。ロールシャッハ法と比較すると、ORT カードは一様に dark gray で、ロールシャッハカードよりも表面的には不安喚起的であるが、図案の形態が明確なために反応は現実的な story になりやすい。結論として、paradigmatic な選択が必要なロールシャッハ法と、syntagmatic な選択が必要な ORT での対照的、あるいは相補的な結果を示しており、両技法は異なった方向から object relationship に光を当てていることがわかった(第 22 回 国際ロールシャッハ及び投映法学会 2017)。

（3）次に研究代表者は研究協力者の北勢病院臨床心理士の片山郁野とともに、健常大学生及び大学院生 26 名を対象者として、ロールシャッハ法と ORT を実施して、比較を試みた。

表 1. ORT の事例別物語の結末

	A	B	C	D
Dep.end	3	6	7	2
Neu.end	5	2	3	1
Pos.end	4	4	2	9

加えて、統合失調症者の特徴も合わせて考察し、第 22 回日本ロールシャッハ学会にて発表した（2019）。その発表では、ロールシャッハ法の各指標と SCORS-C 尺度（対象関係尺度）には正負ともに多くの相関がみられ、ORT によって表現された対象関係が、ロールシャッハ法の各指標が示している意味づけや内容に裏付けられる結果となった。つまり ORT によって浮かび上がる対象関係と、ロールシャッハ法から捉えられる人格構造に一致する点が多くみられ、ORT の信頼性が得られる結果となった。統合失調症の事例では、ORT が物語の内容や流れはロールシャッハ法と比較して具体的で人への感情移入性が高くなり、加えて ORT の『人々の表象の複雑さ』得点、『対象関係への感情投入』得点の低さからも、不安定な内的対象関係が表現されていると考えられる。

表 2. 統合失調症者のロールシャッハスコア

R	14	W:D:d:Dd	71:29:0:0	F%	35.7%
Rejection	0	Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ/R	21.4%	F+%	20.0%
Total Time	3”1	M:ΣC	2:3.5	R+%	57.1%
T/IR	4”2	W:M	10:2	H%	14.2%
T/ch	9”2	M:FM	2:2	M%	14.2%
T/ach	2”6	FC:CF+C	3:2	M+%	100.0%
Turning	0%	P	3	A%	28.5%

（4）まとめと今後の課題

以上の結果より、テスト構造が明確な WISC-Ⅲや質問紙法から構造が曖昧な投映法、中でも描画法、ロールシャッハ法、ORT を取り上げ、その特徴を明らかにしながら児童期から青年期まで

の健常者から統合失調症者までを射程に、研究を重ねてきた。

知能検査では知的機能、知的構造、あるいは適応のスキルを分析し、知的な問題とともに、情緒的な問題を把握することの重要性が認められた。描画法では情緒的な問題を把握することがより支援に必要であることが理解され、セラピーの中で用いられるものとアセスメントとの関係ではより客観的な使用法と、より心理療法的に用いられるものがあることが理解された。

この中では主に人物画テストが用いられたが、研究代表者は風景構成法への試みをしており、風景構成法とロールシャッハ法のテストバッテリーについて、双方の特徴と補完的な利用に関するワークショップを行っている（日本ロールシャッハ学会第 12 回研修会 2019）。今後スクリーニングのために健常児童・生徒の風景構成法の実施を 2020 年度に試みる予定である。

大人のアセスメントに関しては、ORT 自体の特徴を明らかにするとともに、ロールシャッハ法と比較することで 、双方が補完的な役割を持つことが明らかにされた。これらは先の描画テストとともに、臨床事例の問題や病態水準に応じた施行が必要である。それは今後大人から子どもへの適用へと向かう方向性が考えられ、子どもへのロールシャッハ法の実施と研究は少ないが、今後の可能性が示唆される。それが進めば、大人から子どもへのテスト上のスペクトラムが描かれるようになろう。シンポジウム「ライフステージを臨床的に理解するアセスメント」（日本ロールシャッハ学会第 23 回大会 2019）では、研究代表者が一連の年代のスペクトラムの中での子どものアセスメントの問題について、その重要点を述べている。

また ORT については、本邦での子どもへの施行や研究は皆無であり、その試みが増えることが期待される。その意味でも、マニュアルが翻訳されることが望ましいが、著作者の Dr.Shaw が亡くなったために、出版のための作業が停滞を余儀なくされており、この打開が課題であると言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 髙橋昇・黒田浩司・小海宏之・髙橋靖恵・中原睦美	４．巻 22
２．論文標題 これからの心理アセスメント教育を考える	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ロールシャッハ法研究	６．最初と最後の頁 54-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙橋靖恵	４．巻 5
２．論文標題 特集2 心理臨床学会第36回大会 自主シンポジウム ＜スーパーヴァイザーは何を悩むのか＞ －指定討論を経験して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 心理臨床スーパーヴィジョン学（京都大学大学院教育学研究科 臨床心理学講座 臨床実践指導者養成 コース紀要）	６．最初と最後の頁 42-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒田浩司	４．巻 18号
２．論文標題 心理検査におけるサイエンスとアート：「有用な心理テスト解釈を構成するサイエンスとアート、ロールシャッハ法を中心に」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山梨英和大学紀要	６．最初と最後の頁 41－60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 髙橋昇,田代しらべ，片山郁野,髙橋靖恵
２．発表標題 対象関係投映法（ORT）とロールシャッハ法の比較検討－統合失調症圏の事例を通して
３．学会等名 日本心理臨床学会第39回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋昇
２．発表標題 ロールシャッハ法と風景構成法（ワークショップB）
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会第12回研修会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒田浩志,高橋昇（司会）
２．発表標題 ORT（Objective Relations Technique）による対象関係査定の試み
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会第23回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 片山郁野・高橋昇
２．発表標題 ORTとロールシャッハ法に表れた対象関係の比較
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会第23回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋昇,日下紀子,加藤志ほ子,西尾ゆう子
２．発表標題 ライフステージを臨床的に理解するアセスメント
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会第23回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 髙橋靖恵
２．発表標題 会員企画シンポジウム「アートとしてのスーパーヴィジョン－サイエンスとの対話を通して」－指定討論者
３．学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 井村修・江口昌克・桑原知子・沢宮容子・髙橋靖恵・老松克博・野村晴夫・佐々木淳
２．発表標題 大会実行委員会・研究推進事業委員会＜合同企画シンポジウム＞ 「臨床心理的支援における効果研究のあり方－その課題と展望－」 企画
３．学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 髙橋靖恵
２．発表標題 日本家族心理学会ワークショップ A 「家族心理アセスメントの実践」
３．学会等名 日本家族心理学会第35回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 髙橋昇・服部孝子・吉留よしの・髙木浩平・福田恵実・松本麻由美
２．発表標題 教育相談室に訪れた発達障害児童・生徒の長期予後に関する研究（1）-WISC-Ⅲのリ・テストと予後調査から-
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 髙木浩平・髙橋昇・服部孝子・吉留よしの・福田恵実
２．発表標題 教育相談室に訪れた発達障害児童・生徒の長期予後に関する研究（2）-WISC-Ⅲのリ・テストで数値が上昇した事例の検討-
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 福田恵美・髙橋昇・服部孝子・吉留よしの・高木浩平
２．発表標題 教育相談室に訪れた発達障害児童・生徒の長期予後に関する研究（3）-WISC-Ⅲのリ・テストで数値が下降した事例の検討-
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Noboru Takahashi・Yasue Takahashi・Kayou Ishii・Yoshiharu Matuse・Hiroshi Kuroda
２．発表標題 The Practical Study of The Object Relations Technique II ―Relevance with Rorschach
３．学会等名 The 22nd conference of International Society of the Rorschach and Projective Methods（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hiroshi Kuroda・ Yoshiharu Matsuse・ Yasue Takahashi・Noboru Takahashi
２．発表標題 Preliminary study of application of Object Relations Technique to Japanese students
３．学会等名 The 22nd conference of International Society of the Rorschach and Projective Methods（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yasue Takahashi, Miyuki Kaji ,Tomoko Takazawa
２．発表標題 Supervision of Psychological Assessment Related to Projective Methodology and Its Clinical Application
３．学会等名 The 22nd conference of International Society of the Rorschach and Projective Methods（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石井佳葉
２．発表標題 摂食障害を抱えた女性における両親イメージの検討
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋靖恵
２．発表標題 心理アセスメントによる家族関係理解ー投映法を中心としたスーパーヴィジョン
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 黒田浩司
２．発表標題 OTRによる対象関係の査定の試み
３．学会等名 日本ロールシャッハ学会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

1．著者名 森田美弥子,加藤淑子,高橋昇,高橋靖恵,坪井裕子,長瀬治之,畠垣智恵，山田勝	4．発行年 2018年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 272
3．書名 ロールシャッハ法解説ー名古屋大学式技法	

1．著者名 吉崎一人・松尾貴司・斎藤和志編集	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 194
3．書名 心理学概説-こころを科学する（第2版）	

1．著者名 日本家族心理学会編（髙橋靖恵編・執筆）	4．発行年 2019年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 499
3．書名 家族心理学ハンドブック	

1．著者名 高橋昇	4．発行年 2016年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 176
3．書名 ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の統合的活用ー投映法の心理療法的バッテリー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高橋　靖恵 (TAKAHASHI YASUE) (90235763)	京都大学・教育学研究科・教授 (14301)	
連携研究者	松瀬　喜治 (MATUSE YOSHIHARU) (10257579)	佛教大学・教育学部・教授 (34314)	
連携研究者	黒田　浩司 (KURODA HIROSHI) (70261732)	山梨英和大学・人間文化学部・教授 (33503)	